

幼稚園実習における学生の自己評価に関する研究

— 「摂理と輝石」の内容分析を中心に—

渡辺一弘

(八戸短期大学)

I. 問題の所在

本稿は、幼稚園実習における学生の自己評価を、八戸短期大学幼児保育学科の実習に関する文集「摂理と輝石」の内容を検討することで明らかにすることを目的とする。

保育者養成校における実習に関する調査・研究は、これまでも数多く行われている。例えば日本保育学会では、例年学会大会において主として「保育者の資質能力・専門性」「保育専門職の養成」という部会において、量的なデータを基に、分析の視点を絞った詳細な調査・研究が発表されてきた¹⁾。しかし、資料の制限・限界（個人情報保護の問題等も含む）もあり、学生の実習に関する素朴でダイレクトな意見を検討した調査は意外に少ないように思われる²⁾。

筆者が勤務している八戸短期大学幼児保育学科では、2001年より「摂理と輝石」³⁾という実習活動の記録集を文集として発行している。これは、幼稚園・保育所・施設での実習を終えた学生たちが、それぞれの実習で最も印象に残っている出来事を一例だけ⁴⁾取り上げて、文章として書き残してまとめたもので、字数は550字以上640字以内で、学籍番号・氏名・本文・実習先以外は題名も内容も自由に書き、編集段階で教員が誤字脱字等のチェックは行いが、内容については一切触れない。本学科の実習スケジュールは、以下のように、幼稚園実習が最後の実習になっており、例年、幼稚園実習についての記述には、実習の総決算的な内容も見られる。

〈八戸短期大学幼児保育学科・実習スケジュール〉

- ・1年次冬休み — 第Ⅰ期保育所実習
- ・1年次春休み — 施設実習
- ・2年次夏休み前半 — 第Ⅱ期保育所実習
- ・2年次夏休み後半から後期 — 幼稚園実習

そこで、本稿では、この「摂理と輝石」における幼稚園実習に関する記述データを内容分析することで、学生の幼稚園実習についての率直な意見、他の実習も含めた実習全体の総まとめ的な意見等から、本学の学生の幼稚園実習における自己評価＝各自が幼稚園実習をどう捉えたかについてを検討することを目的とする。

II. 事例研究の対象と方法

(1) 分析資料

分析資料は、2008年版『摂理と輝石 ゼミナール研究発表集』⁵⁾の幼稚園実習の記述データを用いる。この2008年版（*2008年3月卒業生分）を使用した理由は、この年度の学生から学内の実習指導が強化され学生の実習に対する意識が高いと推察され、記述データの内容も例年のものよりも濃いものでは、と考えたからである。

具体的な実習指導の強化とは、学内と附属幼稚園で行う「模擬保育」⁶⁾の活動と、これに関連する

「指導計画論」の講義をより充実したものにするため、講義形態・内容を大幅に手直した点である。「模擬保育」の活動については、①主担当教員が1人から3人に増員、協力していただいた附属幼稚園も1園から3園に増加（*本学には附属幼稚園が八戸市内に3園、上北郡に1園の計4園有り、4園に共通してモンテッソーリ教育を基本理念としている）、②これまで代表のグループ・学生が行っていた附属幼稚園で行う模擬保育を2年生全員で行う、③附属幼稚園主導による事前・事後指導を取り入れる、等である。次に「指導計画論」の講義についても、①主担当教員が1人から4人に増員⁷⁾、②主要担当教員が増えた分、それぞれの教員の専門性に特化した指導が可能となった、③学内で指導計画書のフォーマットを作成し、それを用いて量的にも徹底した指導を行っている、等である。

(2) 方法

本稿では、記述データの内容を以下の7つのカテゴリーに沿って分類する。

1. 「園の方針・理念について」
2. 「保育内容・保育技術について」
3. 「子どもについて」
4. 「先生について」
5. 「行事について」
6. 「部分実習・責任実習について」
7. 「その他、内容が複数に渡るものについて」

これらの内容の中から、代表的な記述、特徴的な記述を取り上げ、学生が自己評価＝各自が幼稚園実習をどう捉えたか、について検討し、考察を加える。内容が複数に渡るものについては、その中で記述量が過半数を占めているものを、カテゴリーの1～6の中で分類する。それ以外は7に入れる。

Ⅲ. 結果と考察

まず、実習生と実習園に関する基本的な情報を以下に示す(表1～3)。なおこの学年の全数は98人で、幼稚園実習を行っていない5人の学生は、保育士資格のみの取得学生と一般企業に就職した学生である。また表3の実習園は、すべて私立であった。

表1 性別

	人数	%
男	13	14.0
女	80	86.0
合計	93	100

表2 所在地

	人数	%
八戸市内	56	60.2
八戸市外	29	31.2
青森県外	8	8.6
合計	93	100

表3 実習園

	人数	%
附属園	17	18.3
それ以外	76	81.7
合計	93	100

表4 題名

	人数	%
幼稚園実習を終えて(等)	35	37.6
それ以外	57	62.4
合計	93	100

記述内容の題名については、2/3 近くの学生が、「幼稚園実習を終えて」等の一般的な題名ではなく、内容に即した題名、例えば、「モンテッソーリ教育における子どもの成長」「心に残った言葉」「子どもたちから学んだこと」等の題名を付けている(表4)。

それでは、7つのカテゴリーに沿って内容を検討する。まず、カテゴリーの内訳は以下の通りであ

表5 内容

	人数	%
園の方針・理念	9	9.7
保育内容・保育技術	10	10.8
子ども	19	20.4
先生	1	1.1
行事	14	15.1
部分実習・責任実習	5	5.4
その他・複数に渡るもの	34	37.6
合計	93	100.1

7番目のカテゴリーの「その他、内容が複数に渡るものについて」が40%近くを示しているが、その理由としては、最も印象に残っている出来事を1つに限定できない学生が多かったことと、設定したカテゴリー以外の実習全体に対する思いのようなものを記述していた学生がいたからである。また当初の予想では、6番目のカテゴリーの「部分実習・責任実習について」記述する学生が多いのではと考えたが、10%以下と意外に少なかった。以下、各カテゴリー毎に検討する。

1. 「園の方針・理念について」

園の方針・理念については、附属幼稚園のモンテッソーリ教育に関するものと、その他の園の特徴的な方針の2つに大別される。先ず、附属幼稚園についての記述は以下のようなものである。

「〇〇幼稚園⁸⁾では、モンテッソーリ教育を実践しているということでしたが、私はモンテッソーリ教育について授業で多少は聞いていたのですが、実際どういった内容なのか理解していませんでした。(中略)モンテッソーリ教育の考え方についても以前より理解することができ、とても良い実習をすることができました」(A・女・附属園) (*下線は引用者以下同様)

このように、モンテッソーリ教育を学ぶことができました、という内容がほとんどであった。後者については、以下のようなものである。

「〇〇幼稚園では、保育はもちろん挨拶や礼儀、気配りを心がけることを教えていただきました。今まで何気なくしてきた挨拶の仕方も正しいものではなく、正しい挨拶の仕方まで教えていただきとても勉強になりました」(B・女)

この幼稚園は、しつけや礼儀作法に厳しい幼稚園であり、実習生もそのことが、最も印象に残ったようである。全体として、園の方針・理念に共感した、勉強になったという記述が多かった。

2. 「保育内容・保育技術について」

保育内容・保育技術については、文字通り実際の現場での保育内容や保育技術について印象に残ったことについて触れている。例えば以下のようなものである。

「私が実習に行った幼稚園では、1日の活動のほとんどが、遊びから成り立っていました。私は、遊びを通して子どもたちは色々なことを学ぶことができると思っています。(後略)」(C・女)

「幼稚園実習の中で私は、子どもへの言葉掛けの仕方がとても大切だということを学びました。私が今までやっていた言葉掛けの仕方は、子どもたちの動きを制限してしまうような言葉掛けであったり、『～して』というような強制的な言葉掛けをしてしまうことが多くありました。ですが、(後略)」(D・女)

現場の特徴的な保育内容に驚いたり、保育技術を学んだ事が記述されている。

3. 「子どもについて」

子どもについては、一人の子どもとの出会いについて触れている場合と、その園の子どもたちに全体に触れている場合がある。前者については、以下のようなものである。

「私が最も印象に残っていることは、Aちゃんというダウン症の3歳児の行動です。担任の先生からは『全体を見るけどAちゃん重視で見てね』と言われていました。(後略)」(E・女)

「幼稚園実習で最も印象に残っていることは、関わりが多かったAくんの一言です。(中略) Aくんには身体的な障害があると担任の先生から話をいただき、実習初日からAくんの付き添い役を任されてしまいました。果たして私に務まるのかという不安と責任という重圧で、私は大変困惑しました。そんな私をよそに一方のAくんは、私の手を取り関わりを求めてくる姿が印象的でした。(後略)」(F・男)

どちらも、障害児との出会いについて触れている。これ以外にも、印象に残る子どもについて触れているものがいくつかあった。後者については、以下のようなものである。

「〇〇幼稚園での実習で印象に残っていることは、子ども達の素直さと元気さです。『ありがとう』『ごめんなさい』のような基本の言葉はもちろん、友達と同じ遊具を使いたい時には『貸して』という言葉を使うことができていました。(後略)」(G・女)

このように実習先の幼稚園の子どもたちの全体の様子が具体的に記述されているものが多かった。

4. 「先生について」

先生については、現場の先生の保育技術について感銘した以下の記述1人であった。

「教育実習で一番印象に残っていることは、先生の子どもたちへの声掛けです。何度か子どもたちの前に立ち、指導する機会があり、その時に先生から声のトーン、大きさ、呼び掛けが単調すぎると助言して頂きました。確かに普段の先生の子どもたちへの声掛けに注目すると、先生は子どもたちに注目してもらう為に様々な方法を使っていました(後略)」(H・男・附属園)

内容としては、2の「保育内容・保育技術について」と重複する。最も印象に残るという点では、現場の先生を取り上げることは少ないようであった。

5. 「行事について」

行事については、幼稚園実習の時期が夏休みから秋にかけてなので、様々なイベントの準備について触れているものが多かった。例えば、以下のようなものである。

「私が実習を行った〇〇幼稚園では、実習中に運動会がありました。その為、9月はほとんどが運動会の練習でした。実習が始まったのと同時期に行進の練習も始まりました。(後略)」(I・女)

「(前略) マーチング発表会が近かった為、マーチング練習や和太鼓練習を見学する機会が多くありました。音楽に力を入れているということは知っていましたが、初めて演奏を聴いた時は、とても心に響きました。(後略)」(J・女)

学生たちは、行事の準備を通して子どもたちと仲良くなっていたことが印象に残っているようである。

6. 「部分実習・責任実習について」

部分実習・責任実習については、その大変さや苦勞について触れているものがほとんどであった。

例えば、以下のような例である。

「実習が運動会と重なっていて忙しいということもあり、部分実習、半日実習、全日実習は時間を見つけて行くことになりました。そのため、ほぼ毎日部分実習を行い、半日、全日実習も思っていたより早く行くことになり、不安でいっぱいでした。その中でも印象に残っているのは、半日実習で行った紙粘土でのお弁当作りです。(後略)」(K・女)

「私は、四回の部分実習を行いました。四回のうち、始めの三回は先生のアドバイスをもらい、スムーズに行くことができました。最後の一回は、『身近な物を使っておもちゃを作れるようになる』というねらいを設定し、先生のアドバイスをもらわずに行いました。(後略)」(L・女)

部分実習・責任実習について記述している学生が意外に少なかったことには驚いた。苦しい思い出としての印象が強いため、記述した学生が少なかったとも考えられる。

7. 「その他、内容が複数に渡るものについて」

ここでは、その他の設定したカテゴリ以外の実習全体に対する思いのような事例を取り上げよう。

「最初、幼稚園とは子どもにお勉強をたくさん教えている塾のようなイメージがありました。しかし、私が実習させていただいた附属幼稚園では、子どもたちの自主活動が多く、また展示会に向けての作品づくりの忙しさで、イメージとは違い驚きました。(後略)」(M・女・附属園)

「私は、この幼稚園実習で『幼稚園』を知ることが出来ました。今までの私の幼稚園のイメージは『教育』が主で、給食がなく、午前で終わると思っていました。しかし実際は、教育の中にもきちんと自由があり、給食を食べ、夕方まで預かることもできるということを知りました。(後略)」(N・女)

「幼稚園実習で一番勉強になったのは、幼稚園は子どもを教育するところだということ。(後略)」(O・女)

「私は幼稚園のイメージができませんでした。年少・年中・年長さんのクラスで二日間ずつ観察実習をして、私は年長さんで実習をさせていただきました。まず思ったことは、周りの動きを見て、今は何をやる時間なのか、何をすればいいのかを判断して行動していました。幼稚園の子どもは状況判断や集団行動に優れていると感じました。(後略)」(P・女)

以上のように、幼稚園のイメージ、幼稚園と保育所(園)の違いについての記述が非常に多かった。最後の実習ということで、これまでの保育所実習と比べて総括的な記述も目立った。また、青森県が幼稚園が少なく保育所(園)が多い地域であるという背景もこれらの記述に関係していると考えられる。

IV. 分析結果と考察

以上の分析結果から、本学の学生の幼稚園実習における自己評価についての検討をまとめると、以下の二点が推察できる。

第一に、幼稚園のイメージ、幼稚園と教育、幼稚園と保育所(園)の違いについて捉えた学生が多かった。このことは、青森県一特に八戸近郊一が幼稚園が少なく保育所(園)が多い地域であるという背景と、本学の幼稚園実習が時期的に最後の実習であるという点が関係していると思われる。

第二に、部分実習・責任実習や保育内容・保育技術といった幼稚園実習のメインになる部分より、出会った子どもや行事についての印象の方が強い。このことは、印象として好ましいことを学生たちが記述した傾向にあるようである。

今後の課題として、今回の分析はサンプル的かつ概略的であったが、今後は各年度の同資料を継続的に分析する必要があるだろう。また、「その他」の項目が最も多いという結果については、カテゴリーの再編も行い、更に内容分析の視点も再検討する必要があるだろう。

【註】

- 1) 例えば、今年度の日本保育学会大会の発表においても、以下のような題目の研究発表が行われた
「保育園実習における学生の学びの変容過程に関する一考察—保育所実習と保育実習Ⅱの自己反省調査の分析結果に基づいて—」「保育者養成における自己の『実習課題の取り組み』Ⅱ」「保育士をめざす短大生がえがく保育所・施設の子どもの像と保育士像—その4・実習前後の保育士像比較検討—」「教育実習における指導計画案の立案指導について(4)—幼稚園における指導—」「実習教育における教授—学習過程成立の要素」等々（日本保育学会第61回大会準備委員会 2008, 『日本保育学会第61回大会発表論文集2008』221-223、231-232頁）。
- 2) 例えば、註の1)で示した研究発表も、すべて詳細なアンケート調査を基にしたものであった。
- 3) 「摂理と輝石」の名称の由来については、2001年版の前書きのところに当時の学科長兼実習委員長が以下のように触れて、説明している。
「人間は、生まれてくる環境も、性格も、能力も、容姿も、貧富等々、何一つ自分で選ぶ事の出来ない『摂理』の中に存在している事を、学生たちは実習によってあらためて知ります。また、様々な人達との出会いにより、生きる事の喜びと難しさを現実として実感することにもなります。これは、学生達（人間）にとって大問題であります。未知だった世界に接し、人間の理解を越えた、けれども『意味のある宿命』として受け止めなくてはならないことを漠然とでも知りうるようです。様々な実習状況の中で、学生達は無意識に湧いてくるアガペ的（無償）愛により、人間への接し方を和らげています。
施設で暮らす方々と接する事が出来た時、その方々が学生の心に変化をもたらすこと、これも『摂理』だと思います。学生たちが実習に入る前に抱いていた気持ちは、実習の終わる頃には格段に変化していきます。この変化の過程と広がり、そして人間として育ってゆく様子が文集の中には数多くみられます（後略）」
- 4) 但し、例年、一つに絞れず、複数の例を紹介する学生も少なからず見られる。
- 5) 「摂理と輝石」は途中から、ゼミナール研究発表集と合冊化された。
- 6) 「模擬保育」とは、八戸短期大学幼児保育学科独自の実習事前指導である。1年生の後期と2年生の前期に、それぞれ各ゼミを2グループに分け、各年度のテーマに従い部分実習の指導案を作成し、ロールプレイング（模擬保育）するものである。1年生は専門的な知識がまだ不十分な状況であるので、実施体験をさせることに主眼を置き、学内で学生を対象に行い、その体験を第Ⅰ期保育所実習に活かすのが目的である。2年生は、講義で学んだことを実践の場で活かすことを目的とし、先ず学内で学生を対象に行い、次に附属幼稚園の協力を得て、実際に附属幼稚園で園児を対象に行い、その後の第Ⅱ期保育所実習、幼稚園実習を視野に入れたより実践的な学習として捉えている。
- 7) 但し、現在は2人である。
- 8) 幼稚園名については、本稿ではすべて仮名とする。

【主要参考文献・資料】

- 片桐隆嗣 1997, 「質的調査の技法」『〈社会〉を読み解く技法』北沢 毅・古賀正義編、福村出版 23-44頁。
- 光星学院八戸短期大学 2000, 『桜林学苑史《八短大30年の歩み》』。
- 光星学院八戸短期大学幼児教育学科 2001, 『摂理と輝石』。
- 橋元良明 1998, 「メッセージ分析」『人間科学のための研究法ハンドブック』高橋順一・渡辺文夫・大淵憲一編、ナカニシヤ出版 75-86頁。